

奄美諸島喜界島の鳥類相*

濱尾 章二** ・ 鳥飼 久裕***

The avifauna of Kikai-jima Island of the Amami Islands*

Shoji HAMAO** and Hisahiro TORIKAI***

はじめに

喜界島は九州本土から南に約380km、奄美大島の東に位置する56.9km²隆起珊瑚礁の島である。面積が大きく森林が発達した奄美大島については、特産種アマミヤマシギ *Scolopax mira*、ルリカケス *Garrulus lidthi* が生息するなど独特の鳥類相が明らかにされている（高木 2009）。それに対し、喜界島に生息する鳥類については情報が乏しい。鯨島（1996）は文献調査と観察から喜界島で留鳥18種を報告している。また、NPO法人奄美野鳥の会（2009）は奄美諸島全体の図鑑の中で島ごとに各鳥種の記録の有無をまとめている。しかし、一定の調査に基づく鳥類相の報告はなされていない。

南西諸島では島によって生息する鳥種が大きく異なる（高木 2009）。小面積で、森林があまり発達していない喜界島でどのような種が生息しているか、繁殖しているかは興味をもたれるところである。また、亜熱帯の島嶼は、渡りの中継地や越冬地として重要な役割を担っていると考えられる。

そこで、今回、捕獲を含む調査から明らかにした喜界島の鳥類相を報告する。この調査の大半はダイトウグイス *Cettia diphone restricta* の生態調査に付随して行われたものである。したがって、すべての季節に渡って鳥類相を完全に把握したものではない。調査期間中に確認した種については生息状況・繁殖に関わる行動を記録したが、記録のない種は生息しないことを意味するものではない。

稿を進めるに先立ち、調査に便宜を図って下さった喜界町役場、特に観察情報をお寄せ下さった伊地智告氏、また論文発表の機会を与えて下さった鹿児島県立博物館に謝意を表したい。また、野外調査をお手伝い下さった高美喜男、岩元さよ子、勝山初代、森田秀一（以上、奄美野鳥の会）、前園泰徳（龍郷町

環境教育推進指導員）、水田拓（奄美野生生物保護センター）、山本裕（日本野鳥の会）、西海功（国立科学博物館）、岩見恭子（同）の各氏に感謝する。

方法

調査は奄美諸島の喜界島（北緯28°16'～28°22'、東経129°54'～130°02'）において、13回、合計90日間行った（2004年8月1～2日；2005年1月5～6日、5月4～5日、8月25～26日；2008年3月7～9日、5月7～19日、6月16～21日、11月27日～12月2日；2009年2月9～13日、5月19～27日、6月8～22日；2010年5月5～24日、12月14～18日）。調査では、島内西部の中里地区を中心に観察と捕獲を行った。捕獲は九州地方環境事務所長による許可証の下に行い、捕獲個体は計測等の後、速やかに放鳥した。また、各回の調査に1回の割合で島内全域を自動車で行き、海岸・貯水池などを中心に鳥の観察を行った。

鳥類目録

調査期間中に14目31科78種が記録された。また、一瞬のうちに飛び去ったなどのため、確実に同定できなかったものの、この78種以外の種であることが明らかな鳥も観察された。これらも合わせて報告する。

カイツブリ目 PODICIPEDIFORMES

カイツブリ科 PODICIPEDIDAE

1カイツブリ *Tachybaptus ruficollis*

少数の個体が貯水池に生息している。

ペリカン目 PELECANIFORMES

ウ科 PHALACROCORACIDAE

2ウミウ *Phalacrocorax capillatus*

* この調査は、国立科学博物館総合研究「変動する環境下における生物多様性の成立とその変遷」の中の「南西諸島固有の鳥類個体群の成立・維持機構に関する生態学的研究」の一環として行われた。

** 国立科学博物館附属自然教育園：〒108-0071 東京都港区白金台5-21-5. Institute for Nature Study, National Museum of Nature and Science, Tokyo. (hamao@kahaku.go.jp)

*** NPO法人奄美野鳥の会：〒894-0007 鹿児島県奄美市名瀬和光町12-8. Amami Ornithologists' Club.

2010年12月、川嶺地区の貯水池にて成鳥1羽を観察。

コウノトリ目 CICONIIFORMES

サギ科 ARDEIDAE

3 ミゾゴイ *Gorsachius goisagi*

2008年5月、城久地区の林縁の草地にて1羽を観察。

4 アマサギ *Bubulcus ibis*

繁殖期によく見られる。

5 ダイサギ *Egretta alba*

2010年12月、鳥の山公園、川嶺地区貯水池にて各1羽を観察。

6 チュウサギ *Egretta intermedia*

繁殖期、各所の畑で見られるほか、冬季にも2010年12月には川嶺地区貯水池で1羽を観察。

7 コサギ *Egretta garzetta*

通年、畑や貯水池で見られる。2010年5月19日、1羽が巣材を運搬しており、繁殖の可能性が考えられる。

8 クロサギ *Egretta sacra*

春から夏、海岸で少数が観察される。

9 アオサギ *Ardea cinerea*

繁殖期・非繁殖期とも、畑や貯水池で少数が見られる。

カモ目 ANSERIFORMES

カモ科 ANATIDAE

10 コガモ *Anas crecca*

2005年1月、川嶺地区の貯水池にて数羽を観察。

11 オカヨシガモ *Anas strepera*

2010年12月、長嶺地区の貯水池にてオス（エクリプス）1羽を観察。

12 ハシビロガモ *Anas clypeata*

2005年1月、川嶺地区の貯水池にて1羽、2010年12月、長嶺地区の貯水池にて2羽を観察。

13 ホシハジロ *Aythya ferina*

2010年12月、長嶺地区の貯水池にてメス1羽を観察。

14 キンクロハジロ *Aythya fuligula*

冬季、川嶺地区・長嶺地区の貯水池にて観察される。越冬するカモ類の中では個体数が多い。

タカ目 FALCONIFORMES

タカ科 ACCIPITRIDAE

15 ミサゴ *Pandion haliaetus*

非繁殖期によく見られる。

16 ツミ *Accipiter gularis*

2005年5月、百之台常緑広葉樹林にて1羽を観察。亜種不明。

17 ノスリ *Buteo buteo*

2010年12月、鳥の山公園にて1羽を観察。

18 サシバ *Butastur indicus*

非繁殖期に見られる。

ハヤブサ科 FALCONIDAE

19 ハヤブサ *Falco rusticolus*

2009年2月、荒木地区の海岸にて1羽を観察。2008年12月にも、荒木地区の海岸にて本種と思われる個体を観察。

20 チョウゲンボウ *Falco tinnunculus*

冬季、島内各所で見られる。

キジ目 GALLIFORMES

キジ科 PHASIANIDAE

21 キジ *Phasianus colchicus*

人為的に放鳥されたものが野生化しており、通年畑などで見られる。2009年6月19日、中里地区畑脇の林内で抱卵中のメスが観察された。

ツル目 GRUIFORMES

ミフウズラ科 TURNICIDAE

22 ミフウズラ *Turnix suscitator*

2004年8月、羽里地区のサトウキビ畑にて数羽を観察。

クイナ科 RALLIDAE

23 ヒクイナ *Porzana fusca*

2010年12月、川嶺地区のサトイモの水田にて1羽を観察。亜種不明。

24 バン *Gallinula chloropus*

2005年1月と5月、荒木地区の水路にて観察された。

25 オオバン *Fulica atra*

冬季、貯水池で見られる。

チドリ目 CHARADRIIFORMES

チドリ科 CHARADRIIDAE

26 シロチドリ *Charadrius alexandrinus*

2010年5月23日、湾地区の磯で擬傷する1羽が観察された。また、2010年12月、湾地区の浜で10羽程度の群れが観察された。

27 ムナグロ *Pluvialis fulva*

移動中・越冬中と思われる個体が海岸・畑で観察される。

28 タゲリ *Vanellus vanellus*

2010年12月、川嶺地区のサトイモの水田にて1羽を観察。

シギ科 SCOLOPACIDAE

29 キョウジョシギ *Arenaria interpres*

2005年5月、塩道地区の砂浜にて1羽を、2010年

12月、湾地区の浜にて10羽程度の群れを観察。

30 オバシギ *Calidris tenuirostris*

2005年5月、塩道地区の砂浜にて1羽を観察。

31 キアシシギ *Heteroscelus brevipes*

2005年5月、塩道地区の砂浜にて数羽を観察。

32 イソシギ *Actitis hypoleucos*

通年、海岸で少数が観察される。

33 ソリハシシギ *Xenus cinereus*

2005年5月、塩道地区の砂浜にて1羽を観察。

ダイシャクシギかホウロクシギ *Numenius arquata* or *N. madagascariensis*

2009年5月、長嶺地区の畑にて観察。

ヤマシギかアマミヤマシギ *Scolopax rusticola* or *S. mira*

2005年1月、志戸桶のサトウキビ畑にて、2008年3月7日、林道にて、それぞれ1羽を観察した。

セイタカシギ科 RECURVIROSTRIDAE

34 セイタカシギ *Himantopus himantopus*

2010年5月、滝川地区の畑にて1羽を観察。

ツバメチドリ科 GLAREOLIDAE

35 ツバメチドリ *Glareola maldivarum*

2008年5月、百之台にて1羽を観察。

カモメ科 LARIDAE

36 クロハラアジサシ *Chlidonias hybridus*

2009年6月17日、長嶺地区の貯水池にて1羽を観察。

ハト目 COLUMBIFORMES

ハト科 COLUMBIDAE

37 カラスバト *Columba janthina*

繁殖期に記録が多いが、一定数が通年見られる。百之台常緑広葉樹林のほか、パッチ上の森林が散在する人里周辺にも生息する。

38 キジバト *Streptopelia orientalis*

通年、多くの個体が生息する。2008年5月14日、中里地区にて斜上したススキの上（地上高125cm）に1卵の入った巣を発見。

39 ズアカアオバト *Sphenurus formosae*

農耕地、林縁などで通年生息する。繁殖期にはよく見られ、声も聞かれる。

カッコウ目 CUCULIFORMES

カッコウ科 CUCULIDAE

40 ツツドリ *Cuculus saturatus*

2010年5月19日、鳥の山公園にて声のみ。

41 ホトトギス *Cuculus poliocephalus*

夏鳥として、多数が渡来する。密度が高く、宿主

とされるウグイスに托卵していると思われるが、まだ確かめられていない。

フクロウ目 STRIGIFORMES

フクロウ科 STRIGIDAE

オオコノハズク? *Otus lempiji?*

2009年5月22日早朝、滝川林道にて声のみ。

アマツバメ目 APODIFORMES

アマツバメ科 APODIDAE

42 ハリオアマツバメ *Hirundapus caudacutus*

2010年5月19日、志戸桶の海岸にて数個体を観察。

ブッポウソウ目 CORACIIFORMES

カワセミ科 ALCEDINIDAE

43 アカショウビン *Halcyon coromanda*

亜種リュウキュウアカショウビン *H. c. bangsi* が、繁殖期普通に見られる。

44 カワセミ *Alcedo atthis*

2005年1月、2010年5月、荒木地区の水路にて観察。

スズメ目 PASSERIFORMES

ツバメ科 HIRUNDINIDAE

45 ツバメ *Hirundo rustica*

通年、畑などで見られる。

46 リュウキュウツバメ *Hirundo tahitica*

通年、畑などで見られる。

47 コシアカツバメ *Hirundo daurica*

2005年5月と8月、羽里地区の畑にて数羽を観察。

セキレイ科 MOTACILLIDAE

48 キセキレイ *Motacilla cinerea*

冬季、畑や林道で観察される。

49 ハクセキレイ *Motacilla alba*

冬季、島内各所でよく見られる。

50 ビンズイ *Anthus hodgsoni*

2009年2月と2010年12月、メンハナ公園の芝生上で複数個体を観察。

51 ムネアカタバヒバリ *Anthus cervinus*

2008年3月8日、空港臨海公園にて多くの夏羽個体を観察。

サンショウクイ科 CAMPEPHAGIDAE

52 サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus*

2010年5月21日、鳥の山公園にて声のみ。

ヒヨドリ科 PYCNONOTIDAE

53 ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis*

非繁殖期には多いが、繁殖期には大変少なく、島内全域を調査しても1日に1羽ほどしか観察されな

い。冬季の個体の多くは亜種ヒヨドリ *H. a. amaurotis* であるが、亜種アマミヒヨドリ *H. a. ogawae* と見られる個体もある程度混じっている。

モズ科 LANIIDAE

54 モズ *Lanius bucephalus*

通年、少数が生息する。2010年5月19日、阿伝地区にて餌を運ぶ個体を観察。繁殖している可能性が高い。

55 アカモズ *Lanius cristatus*

2005年5月、羽里地区の畑にて亜種シマアカモズ *L. c. lucionensis* 1羽を観察。

ツグミ科 TURDIDAE

56 ノゴマ *Luscinia calliope*

2005年1月、中里地区畑にて数羽を観察。

57 ルリビタキ *Tarsiger cyanurus*

2005年1月、百之台の林縁にて数羽を観察。

58 ジョウビタキ *Phoenicurus aureoreus*

冬季によく観察される。

59 イソヒヨドリ *Monticola solitarius*

通年、多く生息する。繁殖期に餌を運ぶ個体も観察されており、繁殖しているのは確実と思われる。

60 トラツグミ *Zoothera dauma*

2009年2月と2010年12月、メンハナ公園の芝生上で複数個体を観察。亜種は不明。

61 アカハラ *Turdus chrysolaus*

2008年3月8日、空港臨海公園にてオス成鳥1羽を観察。

62 シロハラ *Turdus pallidus*

冬季、非常に多くの個体が越冬している。

63 ツグミ *Turdus naumanni*

2008年3月7～9日には多く見られた。冬季も見られるが、越冬期よりも移動の時期に多くなるのかも知れない。

ウグイス科 SYLVIIDAE

64 ヤブサメ *Urosphena squameiceps*

2009年2月11日、中里地区やぶにて2個体を捕獲。2005年1月にも百之台にて観察。越冬している可能性が高い。

65 ウグイス *Cettia diphone*

通年、亜種ダイトウウグイス *C. d. restricta* が多数生息する。主にネピアグラス *Pennisetum purpureum*、時にススキ *Miscanthus sinensis* や低木に営巣する。巣の高さは平均83.2cm (S.D. = 31.8, N = 17)であった。一腹卵数は3卵が1巣、4卵が3巣、5卵が1巣であった。巣立ち・捕食はデータロガーを用いて推定(濱尾2009a)したものを含め、巣立ち3巣、捕食5巣であった。営巣場所周辺では、ニホンイタチ

Mustela itatsi、クマネズミ *Rattus rattas*、ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos* が生息し、さらにノネコ *Felis catus* も観察されており、巣の捕食がある程度の頻度で起きていると考えられる(坂上ら印刷中)。

抱卵、育雛はそれぞれ1巣の観察であるが、メスのみが行っていた。また、1羽のオスのなわばり(濱尾2010)の中に2羽のメスが営巣した例があった。巣が発見できない場合でも、同一オスのなわばり内で複数のメスが捕獲されることがしばしばあった。これらのことから、本州の亜種ウグイス *C. d. cantans* (濱尾1992)と同様、オスが一夫多妻となる繁殖システムをもつものと考えられる。

非繁殖期にも繁殖期と同じ場所で同一個体が捕獲される例があり、少なくとも一部の個体は通年同じ場所で生活している。冬季には亜種ウグイスが多く渡来し、越冬する。2008年11月27日～12月2日に捕獲した個体は、亜種ダイトウウグイス6個体に対し、亜種ウグイス46個体(7.7倍)であった。それに対し、2009年2月9～13日に捕獲した個体は、亜種ダイトウウグイス3個体に対し、亜種ウグイス8個体(2.7倍)であった。両調査期間の捕獲努力量や天候は異なるが、この冬季2ヶ月余りの間にダイトウウグイスの個体数の増減はあまりないと考えられるので、亜種ウグイスが(おそらく南下したことによって)減少したと考えられる。

66 エゾセンニュウ *Locustella fasciolata*

2010年5月22日早朝、中里地区のやぶにて繰り返しさえずった。

67 オオヨシキリ *Acrocephalus arundinaceus*

2005年5月、川嶺地区の畑にて1羽を観察。

68 キマユムシクイ *Phylloscopus inornatus*

2008年12月1日、中里地区のギンネム *Leucaena leucocephala* 林で1個体を捕獲(濱尾2009b)。越冬する個体がいる可能性が考えられるが、1～2月にかけてさらに南下している可能性もある(ウグイスの項を参照)。

69 メボソムシクイ *Phylloscopus borealis*

2008年11月28日、中里地区の雑木林で1個体を捕獲(濱尾2009b)。キマユムシクイ同様、越冬の可能性が考えられるが、渡去途中であるのかも知れない。

70 セツカ *Cisticola juncidis*

通年、畑周辺に多い。2010年5月19日、池治地区の畑脇にて4羽の雛と1卵が入ったふ化当日と見られる巣を発見。

カササギヒタキ科 MONARCHIDAE

71 サンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata*

亜種リュウキュウサンコウチョウ *T. a. illex* が、繁殖期に低木林ややぶで多く見られる。

メジロ科 ZOSTEROPIDAE

72 メジロ *Zosterops japonicus*

通年、亜種リュウキュウメジロ *Z. j. loochooensis* が多数生息する。繁殖期は未明から早朝の短時間に非常に活発にさえずる。ギンネムやネピアグラスに営巣し、巣の高さは平均128.2cm (S.D. = 33.4, $N = 6$)であった。一腹卵数は3卵が2巣、4卵が2巣であった。また、1つの巣で雛の捕食を確認した。非繁殖期は、亜種メジロ *Z. j. japonicus* も渡来しているが、リュウキュウメジロよりも数はかなり少ない。

ホオジロ科 EMBERIZIDAE

73 ホオジロ *Emberiza cioides*

2008年11月～12月、地鳴きにて確認。

74 カシラダカ *Emberiza rustica*

2008年11月、1羽を観察。

75 ミヤマホオジロ *Emberiza elegans*

2008年3月8日、2群を観察。

76 アオジ *Emberiza spodocephala*

非繁殖期にやぶで見られる。

ハタオリドリ科 PLOCEIDAE

77 スズメ *Passer montanus*

通年多数が生息する。巣材運搬、餌の運搬、巣立ち後の未自立幼鳥を連れた家族群が観察されており、繁殖している。

カラス科 CORVIDAE

78 ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos*

捕獲はできなかったが、野外観察から、亜種ハシブトガラス *C. m. japonensis* に比べやや小さく、亜種リュウキュウハシブトガラス *C. m. connectens* であると思われる。

考察

今回の調査から78種の鳥類が確認された。また、ダイシャクシギかホウロクシギかを特定できなかった観察は、確認した種の中にいずれの種も含まれていないため、70種の他にダイシャクシギ属大型種が渡来することを示すものである。同様に、種を同定できなかったもののヤマシギ属の種（ヤマシギかアマヤマシギかを特定できなかった観察）、フクロウ類の種（オオコノハズクと思われる鳴き声）も生息（あるいは渡来）することが明らかとなった。しかし、今回の調査では、鮫島(1996)の記録の内1種、奄美野鳥の会(2009)の内、実に21種もが記録されなかった。このことは、今回の調査が喜界島の鳥類を網羅してはいないことを示している。今回の調査は繁殖期が主体のものであり、春秋の渡りの時期に観察される鳥種を記録していない。そのため、渡りの時期

にだけ多数見られるアカハラダカ *Accipiter soloensis* を観察していない。他にも渡り途中の種や少数個体が越冬する種の記録が抜け落ちている可能性がある。また、今回の結果は長期間継続的に記録をとったものでもない。そのため、2006年8月に観察されたというペリカン類 *Pelecanus* sp. (鳥飼ら2010)や、2010年1月から2月に観察されその後保護されたオジロワシ *Haliaeetus albicilla* (伊地智告 私信)、2010年11月下旬に観察されたヒシクイ *Anser fabalis* (同私信)のような珍しい迷行例は記録されなかった。これらを含む鳥類相を十分に把握するためには、年間を通じた継続的な観察が必要である。

一方、今回記録した78種の内、ウミウ、オカヨシガモ、ホシハジロ、ノスリ、タゲリ、セイタカシギ、ツバメチドリ、クロハラアジサシ、ツツドリ、ハリオアマツバメ、ビンズイ、ムネアカタバヒバリ、サンショウクイ、トラツグミ、アカハラ、エゾセンニュウ、ホオジロ、カシラダカ、ミヤマホオジロの19種は、これまでに喜界島で記録のなかった種である。また、ダイシャクシギ属大型種も喜界島で初めての確認である。また、今回の調査でコサギとモズの繁殖の可能性が示唆されたが、これらは奄美諸島では十分な繁殖記録がない種であり、価値のある情報と言える。これらのことは、今回の調査が喜界島の鳥類相を知る上で多くの新たな情報を含むことを示している。

奄美諸島は地理的位置から、多くの鳥類にとって越冬地、渡りの中継地になっていると考えられる。喜界島でも、カモ類、シギ・チドリ類、ツグミ類、ムシクイ類、ホオジロ類の多くの種が冬季や渡りの時期だけに観察された。生息密度は今回調査していないが、シロハラの冬季の密度は極めて高かった。また、ヒヨドリ、ウグイス、メジロのように留鳥性の個体も生息する一方、冬季には越冬個体も混じり個体数が増加するという種もいる。喜界島は多くの渡り鳥にとって越冬地、中継地として重要なものである。

これに比べて、繁殖期の生息種数は必ずしも多くない。今回、巣を発見することにより繁殖を確認したのはキジ、キジバト、ウグイス、セッカ、メジロの5種のみである。また、巣材や餌の運搬などから造巣・育雛をしていると見なし繁殖の可能性が考えられたのはコサギ、シロチドリ、モズ、イソヒヨドリ、スズメの5種である。これらの他に、飛翔力の弱いミフウズラや、繁殖期に多くの個体が生息しているカラスバト、ズアカアオバト、ホトトギス、アカショウビン、リュウキュウツバメ、サンコウチョウ、ハシブトガラスは繁殖していると考えられる。これら繁殖の可能性のある種の数(18種)は、奄美大島の繁殖種数34種(高木2009)に比べて少ないものである。

喜界島の鳥類相の特徴として特記すべきは、シジュウカラ、ヤマガラという一般的な鳥種が年間を通してまったく見られず、ヒヨドリも繁殖期にほとんど生息しないことである。これらの種は奄美大島には普通に生息し繁殖している森林棲の種である。上田(1992)はシジュウカラ、ヤマガラが生息しない長崎大島について、過去に人間活動によって森林が失われたことが原因と考えた。奄美野鳥の会(2009)によると、森林の乏しい沖永良部島、与論島でもこれらの種は記録されていない。喜界島も農耕地が多く、自然林の少ない島である。しかし、少なくとも1920年以降についての解析では森林は6~7km²の面積が保たれてきた(石田ら2004)。測定方法が異なるが、現在は島内の10.85km²森林となっている(喜界町ホームページ <http://www.town.kikai.lg.jp/default.asp>)。1920年以前も、少なくとも百之台周辺の急傾斜地に一定面積の森林は存在したであろう。また、奄美大島と喜界島は25kmしか離れていない。このような島にシジュウカラ、ヤマガラが全く見られないのは興味深いことである。樹洞で営巣するこれらの種にとって、営巣場所が得られるほど発達した森林が少なく、集団を維持できないのかも知れない。一方、冬季に多数渡来するヒヨドリが、繁殖期にはほとんど生息しないことは謎である。ヒヨドリは樹洞営巣性ではなく、都会の街路樹にも営巣するように、発達した森林がなくても繁殖できる。シジュウカラ、ヤマガラが生息しない長崎大島にもヒヨドリは多数生息しており(上田1992)、ヒヨドリがほとんど見られない島は珍しいと言えるだろう。

島嶼では一般に、限られた種が高密度で生息する。喜界島で繁殖する鳥種が少ないのは、この一般的な

傾向に合致したものである。事実、メジロやウグイス、セッカは高密度で生息している。しかし、ウグイスで8巢中5巢が捕食に遭ったように、巢の捕食が高い頻度で起きていることが伺える。人工巢を用いた野外実験から、捕食者は人為的に移入されたクマネズミとニホンイタチであることがわかってきた(他にハシブトガラスも捕食に関わっていると思われる;坂上ら印刷中)。長い期間、ほとんど捕食者がいない状態で集団を維持してきたはずの喜界島の繁殖鳥に対する移入哺乳動物の影響が懸念される。現在、高密度で生息、繁殖している鳥についても、生息状況をモニターし続ける必要があるだろう。

人間活動の影響だけではなく、自然状態でも島に棲む鳥の種や密度は変化することがある。南大東島では、かつて繁殖していたアカモズがいなくなり、かつてはいなかったモズが繁殖している(高木2009)。また、同島では、ウグイス(亜種ダイトウウグイス)が1920年代まで生息していたが絶滅し、その後1990年代後半から(亜種ウグイスが)再度侵入、定着し現在増加しつつある(高木2009, 濱尾 個人的観察)。このように集団サイズが小さな島嶼では、絶滅や移入による個体数の増減や種構成の変化が起こりやすい。今回、喜界島で繁殖が示唆されたモズは、日本鳥類目録(日本鳥学会2000)ではトカラ列島を繁殖の南限としている。かつては見られなかったモズ(伊地智 私信)が、繁殖期にも毎年見られるということに合わせて考えると、喜界島のモズは近年侵入し、繁殖集団を確立しつつある可能性がある。このような自然状態での繁殖鳥の変遷を把握するためにも、引き続き鳥類相を記録し続けることが重要だろう。

引用文献

- 石田惣・西浩孝・佐藤ミチコ(2004)1930年代から現在に至る喜界島の陸産貝類相と生息環境の変遷. 福井市立自然史博物館研究報告(51):25-30.
- NPO 法人奄美野鳥の会編(2009)奄美の野鳥図鑑. 文一総合出版, 東京.
- 濱尾章二(1992)番い関係の希薄なウグイスの一夫多妻について. 日本鳥学会誌40:51-66.
- 濱尾章二(2009a)巢内に設置した温度データロガーによるダイトウウグイスの繁殖経過の推定. 自然教育園報告(40):73-81.
- 濱尾章二(2009b)奄美諸島喜界島におけるキマユムシクイ・メボソムシクイの冬季捕獲記録. 自然教育園報告(40):83-88.
- 濱尾章二(2010)南西諸島に生息するダイトウウグイス *Cettia diphone restricta* のなわばり性:電波発信器を用いた調査結果. 自然教育園報告(41):35-47.
- 日本鳥学会(2000)日本鳥類目録改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広.
- 坂上舞・濱尾章二・森貴久(印刷中)喜界島における鳥の巢の捕食:営巣環境による捕食率の違いと捕食者の特定. 日本鳥学会誌60.
- 鮫島正道(1996)奄美の鳥類. 鹿児島県立博物館(編)鹿児島県の自然調査事業報告書III, 奄美の自然:57-67. 鹿児島県立博物館, 鹿児島.
- 高木昌興(2009)島間距離から解く南西諸島の鳥類相. 日本鳥学会誌58:1-17.
- 鳥飼久裕・高美喜男・貞光隆志(2010)鹿児島県奄美大島におけるフィリピンペリカン *Pelecanus philippensis* の日本初記録. 日本鳥学会誌59:65-68.
- 上田恵介(1992)カラ類のいない島, 長崎大島の鳥相. Strix 11:253-261.